



説教要旨「十字架につけられた救い主」

ルカによる福音書 23章 26～43節

十字架刑の判決が下されたイエス様は、「されこうべ」と呼ばれている処刑場まで引かれていきました。自分で十字架を担いで歩くことが出来ないほどに弱りきったイエス様でしたが、嘆き悲しむ婦人たちに「わたしのために泣くな。むしろ自分と自分の子どもたちのために泣け」（28節）と言われます。イエス様への憐れみの涙を流す彼女らに、自らの罪の深刻さにこそ嘆き悲しみ、その赦しを求めて悔い改めの涙を流すようにと、自分たちがそれほどせつぱ詰まった状況にあることを見つめるように促すのです。

イエス様の十字架の苦しみと死は、イエス様がひどい目に遭われたことを憐れむようなものではないし、イエス様に苦しみを与える者たちに憤るようなものでもありません。わたしたちは十字架にかけられたイエス様を、力ある“救い主”として見つめるのです。

イエス様は十字架の上で、自分を十字架につけた者たちの赦しを神に祈ります。その傍らで、人々はイエス様の衣服をくじで分け合っています。そして人々だけでなく、ローマ兵やさらには一緒に十字架につけられていた同じ死刑囚までもイエス様を侮辱し、無力な救い主だとあざ笑うのです。

イエス様を憐れんで泣く婦人たちも、役に立たない救い主だと侮辱しあざ笑う人々も、みな死の恐怖に捕らわれています。死から逃れること、苦しみからの解放のみが彼らの求める“救い”です。ですから死に向かうイエス様は、彼らの目には憐れみの対象であり、“敗北者”なのです。しかしただ一人、イエス様を“敗北者”としてではなく“勝利者”として見つめている者がいます。イエス様と一緒に十字架につけられた彼は、イエス様をあざけるの受刑者をたしなめます。そして彼は、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」（42節）と願ったのです。この場において彼だけが、“死”の先にある“救い”を求めています。そして彼だけが、その救いをもたらす力のある“救い主”として、十字架につけられたイエス様を見つめているのです。

(2021・3・28 説教者：稲垣真実)